

— H eldensagen vom K osmosinsel —

銀河英雄伝説

赤鼻のルドルフ

R udolph das R otnasige R en

猫屋 真

目次

赤鼻亭にて	 5
フラウ・ロートリンゲン	 21

主要な登場人物

・ グレーチェン・ヘルクスハイム

Gretchen Theresa Herxheim (Margareta Therese von Herxheimer)

銀河帝国の貴族ヘルクスハイマー伯爵の長女。一二歳。父ヘルクスハイマー伯爵は、帝国での政争に巻き込まれ、自由惑星同盟への亡命を試みる。その途上をラインハルトに追撃され、伯爵とその一党は事故死するが、彼女一人が生き残る。ラインハルトの黙認を得て同盟へ亡命。その際、後見人としてキルヒアイスを求めるが、断念。ベンドリング少佐に伴われて同盟へ入った歳に、名を本名のマルガレータ・フォン・ヘルクスハイマーからグレーチェン・ヘルクスハイムに改める。後、同盟軍士官学校に入学する。

・ ヴェンツェル・ハインリッヒ・フォン・ベンドリング

Wenzel Heinrich von Bendring

元帝国軍少佐。三〇歳を少し超えたばかりの、元伯爵家の三男坊で、統帥本部情報部の一員として、ラインハルトらとともにヘルクスハイマー伯爵追跡任務にあたっていた。任務遂行の過程で、ヘルクスハイマー伯爵を巻き込んだ政争の真相を知り、またマルガレータの行く末を案じるままに、その後見人として同盟に亡命する。その後、囑託、さらには正規の大尉として同盟軍情報部に勤務するようになる。

・ マリア・アントニア・フォン・ロートリンゲン

Maria Antonia Josefa Joanna Gräfin von Lothringen

ロートリンゲン伯爵家当主。伯爵夫人。既に七〇歳を超えており、ほぼ銀色に変わった金髪の、端正な老貴婦人。国立オーディン文理科大学理学部数学科の教授で、ラインハルトが入学した年に臨時教官として幼年学校の数学教官を務める。もともとはとある大貴族の連枝に連なる身であり、断絶したロートリンゲン伯爵家を嗣いで、^{グラフィ・フォン・ロートリンゲン}ロートリンゲン伯爵夫人を名乗る。

・ ラインハルト・フォン・ミュゼル

Reinhald von Müsel

『銀河英雄伝説』の主人公の一人。後、ローエングラム伯爵家を嗣ぎ、ローエングラム伯ラインハルトとなる。豪華な金髪と蒼氷色の瞳の貴公子。戦争の天才。本稿の時点で帝国軍少将で一八歳。

・ ジークフリード・キルヒアイス

Seigfried Kircheis

ラインハルトの少年時代からの親友で、同年の一八歳。帝国軍大尉として、ラインハルトの副官を勤める。ルビーを溶かして染めたようなと評される赤毛と、感じの良い青い瞳の長身の青年。

赤鼻亭にて

宇宙暦七九四年一二月。年が明けて、二月になれば、彼らが仰ぐ旗を取り替えてまる二年が経過したことになる。

ヴェンツェル・ハインリッヒ・フォン・ベンドリングは、家路を辿る足を止めて、年末の休暇に向けて急速に装いを改めつつある町並みを見回した。街路樹と言わず、家々の植え込みと言わず、青い小さな光が仄かに瞬いて街路を照らすようになりはじめるのは一二月も半ば頃からのことだ。時を同じくして、繁華街は目にも鮮やかな五彩のイルミネーションに覆われるのだが、彼らが住まいを置く学生街辺りの、やや控えめな印象の青い光の装飾を、ベンドリング自身は好ましく思っている。

こうした年末の祝祭日や休暇を祝う習慣は、べつに自由惑星同盟という国に特有のものではない。それはベンドリングの知識の内にもあることだった。彼の故郷の惑星でも、年末になれば同じような装飾が街を彩り、華やかな音調のBGMが何曲も重なり合うようにして街路に溢れるのも、珍しくもない光景だった。ただし、士官学校を卒業して以来、イゼルローン要塞勤務の長かった彼にとつて、故郷のクリスマスWeihnachtenの有様は、記憶の地平の向こう側に隠れかけているのだが。

「そうか、ここではクリスマスChristmasだったな」

ベンドリングは苦笑する。亡命以来、可能な限り同盟公用語

を使うよう心がけてはいるというものの、身体に染みついた母国語がそう簡単に抜け落ちると言うことはあり得ない。

「何しろ、そなたは三〇年だからな」

一瞬、空耳かと思つたが、明らかに帝国訛を帯びたややとたどしい響きのその声を聞き誤るはずもなかった。

「どうしたのだ、ヴェンツェル・ハインリッヒ？ わたしの顔がそんなに珍しいのか？」

「珍しいからと言つて見詰めるとは限らないでしょう。それに、どうして『そなた』なんですか？」

初めて会つた時から、この女ひと、と言つには若すぎるのでこの娘こというべきか。彼女の言葉遣いは一風変わつていた。

「そこにあるのは何者じゃ？」

最初の一声。口調の鋭さ、言葉の古風さと、声の幼さの見事なまでの不釣り合いさに愕然とさせられた思いを、ベンドリングは昨日のことのように思い出すことができる。一〇歳になるならずの少女が、まるで新無憂宮のただ中のような言葉を操る不自然さを、不自然と感じるほど、ベンドリングは宮廷を離れて久しかったのだ。

ヘルクスハイマー伯爵は、帝国でもかなりの有力貴族に分類される貴族だった。連枝でこそないが、リッテンハイム侯ウィルヘルムの信任を受け、最大の政敵であるブラウンシュヴァイク公を陥れるべく暗躍する任務をさえ、その身に請け負うほどだったのだ。もっとも、ヘルクスハイマー伯を窮地に陥れ、同盟への亡命を余儀なくさせたのも、そのリッテンハイム侯からの信任にほかならなかったのだ。そして、平凡な……と彼自身はそう思っているのだが……一介の情報将校であり、家督を継



く望みなど皆無だった伯爵家の三男坊に、こんな数奇な運命をたどらせたのも、また。

ヘルクスハイマー伯が、一人娘のマルガレータを、いずれ皇帝の後宮に上げるべく教育を施していたであろうことは想像に難くない。ただ、この少女が西苑の小さな世界に収まりきることができたかどうか、その点は甚だ疑問視せざるを得ないのも、また事実だと、ベンドリングはそう思うのだ。

いずれにしても大貴族の娘としては希有の資質の持ち主。そう思ったからこそ、彼はこの少女と共に祖国を捨てる決意を定めたと言っている。

「何を笑っているのだ？ また、昔のことでも思い出しているのか、ヴェンツェル・ハインリッヒ？」

口調はきついが、表情は和んでいる。僅かに翠の彩りを帯びた瞳が、街を飾る様々の灯りを弾いて紫水晶の光に閃いた。

「笑ってないませんよ、グレートヒエン。あなたの言葉が変だと言っただけです」

「そなたのことをそなたと呼んで何が悪いのだ。そなたはそなたではないのか？ それに、誤った言葉を使っているわけでもないのだし」

言葉遊びのように同じ単語を繰り返して発音し、少女……かつてのヘルクスハイマー伯爵令嬢マルガレータ、今はグレーチェン・ヘルクスハイム……は淡い金髪を左右に揺らした。同盟公用語を学び始めてまだ二年足らずだが、人並み以上に語学の素養があったのかも知れない。既にたいいの意思疎通は同盟公用語で事足りるようになったが、彼女の目標は母国語同様にまで同盟公用語を操れるようになること。個人教授の教師に



つき、ハイネセン記念大学の L S F のクラスを毎日のスケジュールに入れているのも、そのためだ。

ヘルクスハイマー家で、この少女はどんな育てられ方、あるいは育ち方をしてきたのだろう。ベンドリングが驚くのは、普通ならそれで手一杯になるだろうに、その上にさらに高等学校相当の教育の受講と、一二歳の体力では少々無理のありそうなトレーニングのメニューまでを日々こなしていることだった。

トレーナーにパーカー。細身のジーンズの上から厚手のグラウンド・コートを羽織る。帝国でも有数の有力門閥貴族の一人娘にあるまじきラフな服装と、乱れて額に貼り付いた前髪とが、彼女がジム帰りであることを示していた。

「そなたのことを、ただお前、だのあなただのとは呼びたくないのだ。だいたい、この国の言葉は単純すぎるのではないか。せめて人の呼び方ぐらい、もう少し種類があっても良いだろう。そう思わないか、ヴェンツェル・ハインリッヒ？」

つまり、グレーチェン・ヘルクスハイムはベンドリングを呼ぶ時だけ、同盟公用語の二人称の中でもっとも古い単語を使う。「お前」でも「あなた」でもなく、「そなた」と。

「それはそうですが、帝国公用語でも似たようなものだったと思いますよ」

「それはそなたが言葉というものに無頓着すぎるのだ。銀河連邦時代の時代には三〇〇種類も言葉があったと聞いた。一人呼ぶにも数十の呼び方をもった言葉もあったそうだ」
言い、グレーチェンは軽く首を振る。肩を少し超えたくらいの高さの金髪は、イルミネーションの光と微風を孕んできらき

らと舞い踊る。

「どなたにお聞きになったのですか？」

「調べた」

素っ気なく言い切り、グレイチェンは不意に帝国公用語に切り替えた。

「大帝陛下のなされようもおかしなものじゃ。どうして今の言葉一つに公用語をまとめねばならなかったのか。そうすることでただけのものが失われるか、思いを致されなかったというのは解せぬ。大帝陛下ともあるうお方が——」

銀河帝国初代皇帝、大帝と呼ばれるルドルフ・フォン・ゴールデンバウムを『大帝陛下』と呼ぶのは、同盟においては犯罪に近い。とは言え、一〇歳になるまで『大帝陛下』の言葉に馴れ、現在の至尊者を『皇帝陛下』と呼ぶに馴らされてきた身には、『史上最悪の篡奪者』、あるいは『篡奪者の不当な後継者』と彼らと呼ぶには違和感が強すぎる。

言葉を切り替えると同時に、囁き声に声を抑える慎重さは、まだ実年齢では一二歳に間のある少女にして希有と言えた。

ベンドリングもまた、帝国の絶対者とその血統を嗣ぐ人々に対する感情は単色のものではない。グレイチェンとともに亡命の道を選ぶに当たっては、無論、この少女を一人で同盟へ行かせるわけにはいかないという義務感が先行したのは確かだ。だが、同時に彼女にそうした運命を強いた、帝国の宮廷のありようが、帝国軍人として忠誠心を大きく削いだのも事実だった。「そのことを我々が議論してもしようがないでしょう、グレートヒエン。ところで、こんなところで何をなさっていたのかをまだ聞いていませんでした」

「そなたを迎えに来たのだ。決まっているだろう。同盟に来てもクリスマスはクリスマスだから、それらしいことをしようと言いだしたのはそなたではないか」
グレートヒエン

ベンドリングは笑う。クリスマスではないでしょう。

紫の眸が丸くなる。照明の不十分さを、ベンドリングは惜しんだ。十分な明るさがあれば、グレイチェンが赤面する……滅多にない光景を目にする機会を得られただろうに、と。

「そなたのことを笑って悪かった。クリスマスだったな」
Christmas

「では、クリスマスらしい行事の予定を申し上げましょう。」
Christmas

ちよつと遠くなりますが、『赤鼻亭』というレストランに予約を取りました」
「食事か……」

「ええ、余り張り詰めてきているのもどうかと思いますよ、グレートヒエン。二、三日、休暇を取るのも悪いことではないでしょう」

「うん——」

ふつとグレイチェンが押し黙る。強い光を帯びた眼差しと、この歳の少女にしては抑揚の小さい、言い換えれば抑制の行き届いた口調が勝ち気さを印象づけるグレイチェンである。だが、そうして唇を引き結んで押し黙ると、年相応、あるいはそれ以上に頼りなげで幼い印象の横顔を見せる。

心細いのか……グレイチェンがそうした表情になる時、ベンドリングはそう理解している。宮廷闘争の中で母を殺され、亡命行の中で父も、慣れ親しんだ家臣達のすべてを失い、祖国が

フラウ・ロートリンゲン

帝国暦四八五年一二月末、ラインハルト・フォン・ミューゼル少将は帝都への帰路にあった。イゼルローン宇宙要塞を巡る六度目の大会戦。その戦いで同盟軍を撃退する上での決定的な役割を果たし、中将、および制式一個艦隊司令官への昇進を確定させての凱旋と言って良かった。

「この戦艦も悪くないが……『ノルデン』は今回も息災だったようだ」

戦艦『タンホイザー』ブリッジ。ラインハルトの声に、赤毛の青年が振り返った。ちなみに『ノルデン』は、彼が『タンホイザー』に将旗を掲げるまで艦長を務めた重巡航艦であり、今も『タンホイザー』の直衛艦として至近を航行中のはずだった。

「ええ。さすがはロイシュナー中佐です。敵巡航艦一を撃沈、駆逐艦二を撃破、スパルタニアン四機を撃墜したとの報告が上っています」

「いずれ大將になったら専用の旗艦がもらえるはずだったな」
「ええ、個人に与えられ、本人が望むか、戦死するか、あるいは罪を得て軍を逐われるかしない限り、皇帝陛下といえども奪うことはできない。それが定めと言っていることになっています」

「皇帝陛下……か」

微かに侮蔑と嫌忌の響きを帯びる。ラインハルトが、声を低めることで他者の耳に声が及ぶのを避けたのは、銀河帝国の至

高者からみれば一介の将官でしかない、現時点の立場をわきまえてのことである。一九歳まで数ヶ月を余して、既に中将たるの地位を約束されている。前例のない若さでの高位といえども、絶対者への不敬を糾弾されれば、卵の殻よりも、その立場は脆い。心の裡に滾る野心を包むべき時を、この若者は十分すぎるほどに心得ている。我が身一人ではない。彼には救い出すべき人があり、彼にとつて半身とも信頼する存在がある。彼らのために、愚かしい不注意さとは無縁でいなければならない。

「早く欲しいものだ、個人としての旗艦を」

「この戦艦も悪い戦艦ではありません。戦艦に心があれば、きつと気を悪くしますよ」

「相変わらずだな、キルヒアイスは。気を配るなら人だけにしろ、戦艦にまで気を遣っているのは、その赤毛があつという間に白髪になってしまふぞ」

指揮シートの上に身を起こし、ラインハルトはにわかに真剣な表情になる。

「——赤毛に白髪が混じると、ひょっとしてピンク色の髪になるのではないか。俺はいやだぞ、ピンク色の髪のキルヒアイスなんて」

「どうでしょうが、父も赤毛ですし、白髪交じりですが、ピンクには見えません。赤と白の縞模様、と言っているところでしょうか」
「そうか……」

頷いて、ラインハルトは何かしら考え込む風情になる。他の部下たちから見れば、半神とも見まごう彼らの指揮官が、深遠な戦略に思いを巡らしているように見えるのだらう。八年来の、この親友であり上官である金髪の若者が、真剣になって白髪混



じりになった友人の姿を思い描こうとしているのだと分かるのはキルヒアイスだけである。

「新しい旗艦がもらえたら、その時はロイシュナー中佐をお呼びになりますか？」

声を潜めたのは、『タンホイザー』の艦長であるエンゲルス大佐への遠慮である。キルヒアイスの見るところ、悪い船乗りではない。まずは一流の艦長だが、彼とラインハルトが共有する未来の幕僚リストの中、旗艦の艦長候補のトップを占めるのはシュタインメツ中佐、次席はロイシュナー中佐ということになる。

「そんな先のことは考えても仕方がない。要は次の戦いをどう勝つか、だ」

負けることなど考えてもいない口調で、ラインハルトは言い切る。

「どんなつまらない、愚かな戦いだつたとしても、勝てば地位を得られる。地位を得られれば、それだけ早く姉上を救い出すことができる」

大きな声で口にすることはできない。それはキルヒアイスがラインハルトと共有する想いでもある。そして、次の、『つまらない、愚かな戦い』が既に予定されていることを彼らは知っていた。

第六次イゼルローン攻防戦での帝国軍戦死者は三六万八八〇〇名余。帝国軍統帥部は、これをして『今次の戦いは戦死者少数にして、我が軍の勝利なれば、直ちに叛徒への報復を企図すべし』と称している。

冗談ではない——キルヒアイスは心底思っているのだ。三七万の人



生を中断させ、その家族を悲嘆の底に沈ませ、一〇〇万を超える、あるいは四肢を喪い、重度の火傷の爪痕を全身に刻まれ、または中性子爆弾による深刻な心身の障害に苛まれることとなる負傷者たち。それらを指して、『少数の犠牲』と言つ、その彼らの心性が、彼の嫌悪を誘うのだ。

次の戦いは年の明けた帝国暦四八六年二月、帝国軍艦隊はイゼルローン回廊を抜け、叛徒領出口にほど近いティアマト宙域をその戦場とする予定だという。それにしたところで、単に『イゼルローンへの攻撃に対する報復』と称されるにとどまる。ラインハルトが口を極めて……勿論、公然ではないが……非難するように、帝国軍の総帥部には、その戦いでどのような戦略的課題の解決を図るのか、などという意識は皆無に違いない。『閣下、叛徒軍の放送を傍受いたしました。今次の戦いについて評論をしておりますが、いかがいたしましょうか』

情報先任参謀が声をかけてくるのに、ラインハルトは視線を動かした。

「なんと評している？」

「は、イゼルローン要塞の厚化粧を再び引き剥がし、我が帝国軍艦隊をして狼狽の極に陥れた。帝国軍は、雷神の槌にすがつて辛うじて要塞を保持したのみで、叛徒軍は戦いの戦術的勝利を確保した、と」

ラインハルトの、端麗を極めた唇が嘲笑を紡ぎ出した。

「戦術的勝利を確保した、か。これは傑作だ。いかにも無能者たちが負け惜しみに言い出しそうな台詞だな」

「——ミューゼル提督！」

キルヒアイスの声に微かな叱責に似た響きが帯びたのは、ラ